

※当日、配布したものを、実際の講座の内容に適したように一部書き直しました。

日本の近現代史

## 日清戦争と朝鮮の近代化

(<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>)

### 0、日清戦争とはどのような戦争だったのか？

#### I、朝鮮王国の歴史

- 1392 朝鮮王国（李朝）の建国…李成桂（倭寇を撃退）→国号を明から与えられる  
国家の学問としての朱子学（儒学一派）→科学の科目に、官僚＝学者  
15世紀 訓民正音（ハングル文字）の制定
- 1592 豊臣秀吉の侵略（壬辰・丁酉倭乱）（～98）  
→1607 日本に回答兼刷還使（のちの通信使派遣）→善隣？関係成立  
1609 己酉約条＝対馬を窓口とした国交・貿易、釜山に草梁倭館設置
- 1627/1636 清（後金）の侵略→宗属関係。さらに清が中国全土を支配

「夷狄」とみなしていた女真族の清が本家「中華」の明を滅ぼし、朝鮮を属国とした！  
→小中華思想「清に臣従はするが、朝鮮が『中華』の正統な後継者で担い手」と考える  
→中国や他国から学ぶ姿勢を失い形式主義化・独善化

- 1863 高宗の即位・実父・大院君の政治  
王権の強化と強硬な鎖国攘夷政策（衛正斥邪論＝朱子学原理主義！）をとる  
→米・仏勢力を撃退、日本を「欧米の走狗」とみなす←「征韓論」発生
- 1873 癸酉政変…高宗の親政（閔氏政権へ）→改革の停止、日本との交渉の開始

#### II、朝鮮の開国と近代化をめぐる混乱

- 1875 江華島事件…日本軍艦の挑発にたいし、朝鮮側が発砲  
→1876日朝修好条規（江華島条約）締結 「朝鮮の自主」＋不平等条約の内容  
→朝鮮政府、開化政策をすすめる、大院君など衛正斥邪派の強い反発
- 1882 壬午軍乱…兵士の反乱に大院君派が結合→日本公使館などを襲撃  
→日清両国の出兵→清の軍事力によって鎮圧＝清軍の駐屯＝影響力の拡大

清の対応の変化…不干涉政策から、日本・ロシアに対抗し内政・外交への介入へ  
清の影響下に近代化を進める方向→開化派(事大党・独立党)の分裂・日本の反発

- ※（日本）軍備拡張を開始＝専守防衛型から外征対応型に（鎮台→師団制）
- 1884 甲申事変…独立党の金玉均ら日本公使館の援助下におこしたクーデター  
→清軍によって鎮圧される  
→日本側軍隊を派遣、朝鮮から補償を獲得
- 1885天津条約 日清両軍の朝鮮からの撤退、出兵に際しての相互通告  
以後、表面的には平穏な時代が続く

### Ⅲ、日清戦争前夜の朝鮮と国際情勢

#### 1, 清（袁世凱）の介入の強化→日本や列強の反発

= 「中朝商民水陸貿易章程」 = 中国の特殊な権益を規定、欧米製品の輸出へ

清 …日本・ロシアの朝鮮への影響力拡大を嫌う。宗主国としての特殊な権利維持。  
日本…朝鮮への清・ロシアの影響力拡大を嫌う→朝鮮が改革できねば・・・。  
イギリス…ロシアが最大の敵。朝鮮沿岸にロシアが基地を獲得することを嫌う。  
ロシア…朝鮮への進出には慎重、英の動きには神経質。海軍は朝鮮に基地を熱望。

#### 2, 高宗のロシアへの接近

清・日本・イギリスの反発 朝鮮（高宗）への信頼低下

イギリスの巨文島占領→清・露間での合意をもとにイギリスの退去を実現

#### 3, 国内の矛盾の高まり

日本による経済進出…綿布を売って穀物を買占める→防穀令・経済構造破壊

朝鮮政府…財政難を売位売官で補填→地方官・要した費用を転嫁→民衆の疲弊

→本来の賑恤しんじゅつ機能の破綻=政府への不信と国王への期待

#### 4, 東学の浸透

1860年、没落両班の崔濟愚が、民間信仰と儒・仏・仙をもとに、欧米列強の武力の基礎にある精神力の「西学=天主教」に対抗する「輔国安民」の宗教として創始した宗教。「人すなわち天」とする人間の平等思想をもとに、修行によって、「済病長生」が可能になり、さらには世直しの「後天開闢」が実現し身分的差異のない地上天国が実現する、と説いた。

### Ⅳ、日清戦争の発生

#### 1, 1894 全羅道などで東学農民戦争（全瑋準ら）の発生→5月末全州を占領

農民軍の要求（中塚明のまとめによる）

①おやみやたらに税をとる強欲な悪い役人を辞めさせる、②三政（田の税、軍役の代わりに出す人頭税、貸し付け穀物の利子税）の改善と不当な徴税の撤廃、③外国商人の不当な活動の禁止

#### 2, 朝鮮政府、清に派兵を依頼（←袁世凱？閔泳駿？高宗？）→清、出兵へ

→情報を未然につかんだ日本も出兵準備→通告と同時に大軍を派兵

→全州和約の成立=農民戦争解決→朝鮮政府、両軍への撤兵要請

→日本、「自主独立実現」「朝鮮の内政改革」などを主張し撤兵を拒む

#### 3, 7月23日…日本軍、朝鮮王宮を襲撃、大院君政権→金弘集開化派親日政権成立

→日本、朝鮮政府の要請があったとして清軍への攻撃を開始

#### 4, 日清戦争の発生

・7月25日豊島沖海戦・高陞号事件、7月29日成歓の戦い→8月1日清に宣戦布告

### Ⅴ、日本側の事情

#### 1, 条約改正交渉の進展…領事裁判権廃止と、国内開放・内地雑居の引き換えて合意へ

→議会（旧改進黨+体外硬）の大反対（自由党は賛成へ）、反対決議を乱発

→第二次伊藤内閣・議会解散を繰り返す

#### 2, 清との緊張→開戦により政府攻撃を恐れようとする

→陸奥宗光外相・川上操六参謀次長…開戦を想定しての大軍の派兵

→もし手ぶらで帰ってくれば、政府は崩壊の危機に

陸奥外相・大鳥公使…強引に日・清開戦に持ち込む

### 3, 戦況優勢に

9月16日平壤の戦い、以後、戦場は東北部へ、旅順陥落（旅順虐殺事件）

旅順虐殺事件…日本軍による捕虜、婦女子・老人を含む一般住民を大量に虐殺、外国メディアの報道で表面化→いったん事実を認めたが、のちごまかしに終始。処罰なし。

海軍の勝利 黄海海戦→威海衛包囲作戦＝清国海軍壊滅

### 4, なぜ日本が勝てたのか…「海軍装備などでは「清」の方が上のはずが・・・」

- 1) 清…「中体西用論」＝中国の体制は手をつけず、西洋の軍備や科学技術を利用  
→軍備では日本に勝る面も多いが、それを生かすシステムが未整備  
→指揮官の多くも、兵士も主体者意識が欠落する、身分制による編成
- 2) 日本…国民国家の形成＝『自国』意識が生まれつつあり、日清戦争で強化された新興国家の利点…実力主義・指揮のシステム化、当事者能力、教育水準
- 3) 拳国一致体制の形成…「初期議会の終焉」、戦争協力ぶりを競う  
→排外主義と大国主義の広がり、中国（および朝鮮）への差別と偏見

## VI、戦争のなかで

### 1, 朝鮮における「改革」（甲午・乙未改革1894～95）の進展

①開化派による全面的な近代化の促進（※日清戦後の分も含む）

王権制限・内閣制度導入・科挙の廃止・儒教の排除・軍隊警察改革・地方制度改革・財政の一本化と予算制度・幣制改革・度量衡統一・近代的裁判制度・縁坐制の廃止・学校教育制度・留学生派遣・封建的身分制度廃止・賤民制度廃止・太陽暦採用・早婚禁止・断髪令

②日本軍への協力と、日本の意向を受けた改革

①内政改革施行 ②鉄道の早期敷設 ③日本軍が敷設した軍用電信の条約化④新たな貿易港開港⑤景福宮襲撃（7月23日戦争）を不問に⑥「自主独立」の合同会議開催⑦王宮警備の日本軍の撤退

※「日兵の進退および其糧食準備の為、及ぶだけ便宜をあたうべし」

### 2, 甲午・乙未改革＝朝鮮における「近代化」への苦闘と日本

(1)朝鮮での「近代化」の二つの課題

A, 「反封建」…伝統的な社会と政治支配・「小中華」思想からの解放

B, 民族の自立・独立…「宗主国・清」・日本・欧米列強との関係調整

(2)朝鮮諸勢力の苦闘＝二つの課題へ、それぞれの対応

①「衛正斥邪」論(大院君?)…伝統的価値遵守、Bを重視、Aと日本を敵視

②独立党(金玉均ら)…清の影響力排除。王朝の近代化(⇒Aの実現?)

③東学農民戦争…民衆の力でのAの実現。国王幻想⇒Bも視野に

④甲午改革(金弘集ら)…日本の力を背景に、Aを上から本格化

⑤高宗夫妻…国王独裁実現下での上からの改革・ロシアの援助に期待

### 3, 日本の政策の変更

①朝鮮の保護国化をめざす。

「名義上独立国と公認するも、帝国より間接に直接に、永遠もしくは長時間、その独立を保翼扶持し、他のあなどりをふせぐるの労をとる」(陸奥が示した乙案)

⇒保護国化にむけた朝鮮の改革を促進＝井上馨を派遣

日本型「立憲君主国」＝国王の権限削減、日本人官吏の採用を促進

⇒国王夫妻の反発、親日派政権との対立激化

③領土獲得に向けた軍事作戦に移行＝満州(遼東半島)・台湾など

#### 4、もうひとつの日清戦争＝東学農民戦争掃討戦

日本軍の徴用・徴発、大院君の策動→朝鮮全土で東学軍の再蜂起（約13万？）  
→日本軍は、朝鮮政府軍・両班地主らからなる「義勇軍」とともに鎮圧  
川上参謀次長「ことごとく殺戮すべし」→少なくとも5万人が殺される

### V、戦争の終結と台湾掃討戦

#### 1、下関条約（伊藤博文・陸奥宗光←→李鴻章）あまりに過酷な内容。

①朝鮮の独立を承認 ②台湾と澎湖諸島、遼東半島を譲渡 ③2億両の賠償金 ④4港の開港 ⑤日中修好条規の破棄、新たな不平等条約締結
---

→東アジアの国際環境を激変する内容＝列強の反発

#### 2、三国干渉…ロシア・ドイツ・フランスは軍艦派遣、遼東半島返還を要求→受諾

- ①日本国内での反発、ロシア脅威論の高まり「臥薪嘗胆」のスローガン
- ②朝鮮での反日本勢力（＝高宗・閔妃ら）の復活→親日勢力の退潮・「改革」の停滞

#### 3、台湾掃討戦

台湾住民の激しい抵抗＝「台湾民主国」、ゲリラ戦、疫病の蔓延  
→14000人の台湾人が殺害、「平定」後も12000人が「死刑」などにされる  
→日本兵の死傷者5320人（北白川宮も病死。戦死説も）

#### 4、日清戦争の日本側の死者 公式には戦死1415人 戦病死11894人

- ①戦病死者の圧倒的な数（コレラ・脚気・マラリア）
- ②この数は正式な兵士のみ、軍夫の死者は不明（7000人以上？）

不十分な補給体制を大量の軍夫（←旧士族や侠客など）で補填。動員者は約154,000人との推計

### VI、おわりに～日清戦争とはどのような戦争だったのか

時期：1894～95

戦ったのは：日本、清、（朝鮮政府）（朝鮮民衆）（台湾人）

戦場は：（朝鮮半島）と黄海、清の東北部（満州）南部など、（台湾）

戦争の原因：（朝鮮統治）のあり方をめぐる日・清の対立など

戦争の結果結ばれたのは（下関）条約

日清戦争がもたらしたもの

- ①植民地の獲得＝帝国主義国の仲間入り→列強の一角へ
- ②（朝鮮・東アジア）情勢のさらなる混乱
- ③日本における（国民国家）成立
- ④以後、50年にわたる「戦争の時代」（「五十年戦争」）の開始
- ⑤日本人のアジア意識の変化＝「脱亜論」・排外主義と大国主義意識

#### <参考文献>

原田敬一『日清・日露戦争』『日清戦争』、檜山幸夫『日清戦争』、大谷正『日清戦争』、  
岸本美緒・宮嶋博志『明清と李朝の時代』、宮嶋博志『両班』、木村幹『高宗・閔妃』  
糟谷憲一『朝鮮の近代』、姜在彦『朝鮮の攘夷と開化』  
趙景達『近代朝鮮と日本』同編『近代日朝関係史』、岡本隆司『世界の中の日清韓関係史』、  
森山茂徳『近代日韓関係史研究』『日韓併合』、海野福寿『韓国併合』『日清・日露戦争』  
中塚明他『東学農民戦争と日本』、和田春樹『日露戦争 起源と開戦上・下』